

[シンポジウム]「歴史語用論：その可能性と課題」

英語史における語用論標識の文法化*

福元 広二

In this paper, I propose that historical pragmatics has developed in proportion to the growth of corpus linguistics, particularly the spread of the Helsinki Corpus. This paper also attempts to demonstrate from the viewpoint of historical pragmatics that the idiomatic expression *I say* has been grammaticalized through four stages in the history of the English language. In addition, the final section presents the sociolinguistic characteristics of the users of the expression *I say*.

キーワード：語用論標識、文法化、コーパス、英語史

1. はじめに

歴史語用論とは語用論の理論的枠組みを歴史的なデータに応用しようとする歴史言語学と語用論の接点にある研究領域である。歴史語用論の歴史はまだ浅く、1990年代の中頃から始まったと言われている(Carroll et. al. 2003, Peikola and Skaffari 2005, Jucker 2005)。記念すべき最初の業績はJucker(1995)であり、世界中にこの名称が広まる契機となった。さらには、*Journal of Historical Pragmatics*の発刊(2000)により、この分野の研究の幅が広がるとともに、研究の量も年々増加している¹⁾。また最近では語用論、あるいは歴史言語学の下位分野として、国際学会などでワークショップが組まれるようになり、歴史語用論としての立場は確固となりつつある²⁾。

英語史研究においても、史的電子コーパスを用いて文法化・主観化の側面から、ある言語項目の意味や機能を通時的に分析しようとする試みが増えてきている。

本稿では、まず歴史語用論とコーパス言語学との関係について簡潔に述べる。そして歴史語用論研究はコーパス言語学、特に英語の史的コーパスに追随する形で発展してきたことを指摘する。その後、英語史における文法化の事例研究として、現代英語において語用論標識(Pragmatic Marker)として間投詞的に用いられる *I say* を取り上げ、この構文が、中英語期から近代英語期にかけて段階的に文法化・主観化してきたことを紹介する。また、コーパス

として劇作品を扱うことで、劇の話し手と聞き手という対人機能的な観点から、どのような人物がどのような場面・状況でこの表現を用いるかという社会言語学的な特徴についても分析を行う。

2. 歴史語用論とコーパス言語学

コーパス言語学は、歴史語用論よりもやや早く、1980年代のコンピュータテクノロジーの発達とともに発展し、1990年代になってテキストが電子化されるようになると、歴史言語学においてもコーパスを用いた研究は急速に普及した。英語史研究において、最もよく用いられる通時的な電子コーパスは Helsinki Corpus である。このコーパスは Helsinki 大学において編纂され、古英語の8世紀から、初期近代英語の18世紀までの様々なジャンルの資料をカバーする約160万語の汎用コーパスであり、1991年に世界中に公開された。古英語と中英語に関しては、ほぼ100年ごと、初期近代英語に関しては、70年ごとに区切っているため、通時的な調査においては非常に有効である。しかし各時代の語彙数を約50万語に限定したために、全体のコーパスサイズが小さいという量の問題があり、また1つの作品でみれば、その作品全部でなく、作品の一部だけを収録しているという質の問題もしばしば指摘されている。

しかしながら、この Helsinki Corpus の完成によって、英語史研究において、広いスパンで見渡すことが容易になったばかりでなく、様々なジャンルを比較することもたやすくなった。Helsinki Corpus の登場は英語史研究における一大転換期となり、従来の英語史研究から革命的な変化をもたらした。このコーパスが生み出した最大の成果が歴史社会言語学と歴史語用論という新しい2つの分野であると言っても過言ではない。

最近では、Helsinki Corpus のような汎用コーパスではなく、ある特定のジャンルだけを集めた電子コーパスも完成した。たとえば、手紙だけを収集した Corpus of Early English Correspondence (1410-1681) や、裁判記録、喜劇、小説など6つのジャンルの対話文のみを含む Corpus of English Dialogues (1560-1760) などである。このようなコーパスを利用して、歴史社会言語学や歴史語用論の立場からの研究も行われるようになってきており、特に語用論タグを付与したコーパスを利用した研究も見られるようになってきたのは注目に値すると言えよう (Shiina2003)。

歴史語用論の研究はその大部分がこうした史的電子コーパスを利用したものであり、史的電子コーパス、特に Helsinki Corpus を利用することが可能となった後に歴史語用論が台頭してきたと言える。

3. *I say* の文法化

歴史語用論の中の研究分野の1つとして、語用論標識 (Pragmatic Marker) の研究がある。Hansen and Rossari (2005)によると、語用論標識の通時的な研究は、最近15年で急速に行

われるようになってきたとある。さらに、*Journal of Historical Pragmatics* (2005:2)においても Evolution of Pragmatic Marker という特集が組まれ、最近の語用論標識への関心の高さを窺わせる。

本節では現代英語において語用論標識として用いられる *I say* を取り上げ、文法化の観点からこの構文の歴史的な用法の発達について分析する。1 人称代名詞 *I* と発話動詞 *say* が結びついたこのイディオムは、現代英語において相手の注意を引いたり、話し手の驚きを表すような間投詞的な用法がある。この語用論標識としての用法が、英語史上、どのようにして発達してきたのかについて、主に近代英語ドラマコーパスを用いて、通時的に4段階に分けて見ていく³⁾。Brinton(2005)では、*say* と *I say* を区別せずに、その用法を6つに分類して通時的に考察しているが、本稿では *I say* のみを扱う。

I say の第一段階としては、*say* が本動詞として用いられている用法が挙げられる。この動詞は、OED によると古英語にまで遡ることができる英語本来語である。以下の(1)から(4)の例において、*say* は本動詞として用いられている。

Stage 1 命題用法

- | | |
|---|---|
| (1) I seye that it shal been universal and total. | (c.1390 Chaucer, <i>CT</i> , <i>Pars</i> 291) |
| (2) Dame Pertelote, I sey yow trewely | (c.1390 Chaucer, <i>CT</i> , <i>NPT</i> 3122) |
| (3) Ye be to blame, by God! I sey yow sooth. | (c.1390 Chaucer, <i>CT</i> , <i>WBT</i> 450) |
| (4) He thankyd hur ofte, as y yow say. | (1350 <i>The Earl of Toulouse</i> 394) |

(1)の例は中英語期の Chaucer に見られる *say* の本動詞としての用法であり、*that* 節を従えている。(2)、(3)、(4)の例では、いずれも文末に見られ、*I sey yow* (*I say you*) の形を取り、イディオム的に用いられる用法である。この用法は、中英語期から見られ、埋め草的にフィラーとして、文中あるいは文末で用いられる。従って、(1)と(2)以下の例では機能の違いが見られ、段階が少し進んでいるとも考えられる。つまり、(2)から(4)の例で、*I say* は文構造の外に独立的に置かれ、話者の心的態度を表していると考えられる⁴⁾。この用法は中英語では、主に詩に見られ、特にロマンスの作品に多くみられる。話し手が強制的に、「本当のことを言ってるんですよ」という意図で、このフレーズを何度も繰り返しながら、話しを進めていくという文体的なテクニックの一種であると考えられる。また、このような挿入句としての用法には、脚韻を合わせるという大きな理由もあり、Saito and Imai(1988)のロマンスのコンコーダンスで調査してみると、ほとんどこの挿入句は脚韻の位置にあることがわかった。

第2段階として、*I say* は中英語期の後半になると繰り返し機能という用法を持つようになる。つまり、*I say* は、語・句・文の前後に付加され、繰り返しの機能を示す標識として用い

られるようになる。OEDによるとこの用法の初例は1220年である。話し手が何かを言い、聞き手が聞き取れなかった場合、話し手がもう一度繰り返す際に、繰り返される語に *I say* をつけて、「私は～と言ったのですよ。」のように聞き手に繰り返された言葉であることを明示する役割を果たしている。

Stage 2 繰り返し標識

- (5) *Cap.* What noise is this? Give me my long sword ho!
La. Cap. A crutch, a crutch! why call you for a sword?
Cap. My sword, I say! (1594 Shakespeare *RJ* 1.1.75-7)
- (6) *Des.* It is not lost; but what and if it were?
Oth. How?
Des. I say, it is not lost. (1604 Shakespeare *Oth* 3.4.83-5)
- (7) *Mrs. Hardcastle.* I tell you, Tony, by all that's
precious, the jewels are gone, and I shall be ruin'd for ever.
Tony. Sure I know they're gone, and I am to say so.
Mrs. Hardcastle. My dearest Tony, but hear me.
They're gone, I say.
(1773 Goldsmith, *She Stoops to Conquer* 3.3. 233-8)

(5)の例は、Shakespeareの例で、*my sword* という名詞句が繰り返されている。(6)の例では、句ではなく、*It is not lost* という文が繰り返されている。18世紀になってもこの用法は続き、(7)のような例も見られる。ある発話を何度も繰り返すということは、語用論的には、話し手のいらいらした気持ちが発生すると考えられ、そのため *I say* の中に、「いらいらして言う」のような意味がコンテキストによっては、含意されることになる。Shakespeareにおける *I say* のこの用法は、命令文と最も多く共起する。その際には、命令文の後、つまり文末に置かれることが一般的である。

3番目の段階として、初期近代英語期に入ると、*I say* が人を呼びかける時に用いられるようになる。この用法は現代英語にも残り、話し手が聞き手の注意を引くときに用いられる間投詞的な用法である。OEDでは、1611年の Beaumont and Fletcher の劇が初例となっている。しかし、近代英語ドラマコーパスで調査してみると(8)の例のように16世紀からすでに見られることがわかった。

Stage 3 呼びかけ

- (8) Dame Chat, I say, where be ye? Within?
(1566 *Gammer Gurton's Needle* 2.2.19)
- (9) Why, Alice, I say.
(1614 Jonson *Bartholomew Fair* 4.5.67)
- (10) Sozell! Sozell, I say, Sozell!
(1871 *The Bells* 2.2)
- (11) Tell me, I say, Harcourt, how dost thou like her?
(1675 Wycheley *Country Wife* 2.1.149)
- (12) 'Slife, madam, I say—had you any of these little elegant expenses when you married me?
(1777 Sheridan *School for Scandal* 2.1. 68-9)
- (13) I say, sir, what do you think of the affairs of the nation?
(1840 Bulwer-Lytton *Money* 4.2.)

この呼びかけの用法では、*I say* はしばしば固有名詞と共起し、固有名詞の後に置かれることが多い。(8)、(9)、(10)においては、その場にいない人物を呼ぶときに用いられている。また、(9)では *why* という苛立ちを表す標識とともに用いられている。OEDによると、*why* は *impatience* を表すとあり、Shakespeare が初例となっている。また(10)のように、人名を何度も繰り返すときにも *I say* はよく見られる。これは、Stage 2 の繰り返し用法としてみなすこともできる。このように、人名を何度も繰り返す場合、劇においては、主人が召し使いを呼びつける場合に多く見られるので、*I say* は目上の者が目下に対して用いられることがわかる。(11)では、*I say* が疑問文の前に置かれている。この例では、その場にいない人を呼びつける用法ではなく、聞き手がその場、話し手の目の前におり、聞き手の注意を喚起する用法となっている。Brinton (2005:287)は、(11)のような *say* と *tell me* のように発話動詞が共起している例に着目し、このような場合、*say* の意味は漂白化されやすいと述べている。(12)は、夫が妻に向かって言うセリフで、妻を非難する場面である。ここでは 'Slife という誓言と共起している。このような Stage 3 の用法は、(13)のように、19 世紀までは一般的である。しかし、この用法は現代英語ではあまり用いられず、辞書などでもイギリス英語における古い用法として記載されている。

Stage 3 の用法を統語的にみると、*I say* が文と共起する場合には、*I say* は、ほとんど疑問文の前、つまり文頭に置かれている。Shakespeare の頃は、文末に置かれることが多いのであるが、18 世紀ごろから次第に文頭へと固定化していく傾向が見られる。これは Stage 2 の繰り返し用法が減少していき、Stage 3 の呼びかけ用法が増加していくことが考えられる。つまり、歴史的に見れば、繰り返しの用法から、その場にいない人を呼ぶ用法、そして、聞き手がその場において、聞き手の注意を引いたり、話題を変えたりする標識として使われることが一般的となっていくと言える。

最後に、Stage 4 として、*I say* が話し手の感動を表す用法を見ていく。この場合、聞き手の存在は必ずしも必要なく、話し手側の軽い驚きを表す。OED やその他の辞書では、Stage 3 の呼びかけ用法と Stage 4 の話者の驚きを表す用法は区別されておらず、間投詞用法として1つの意味にまとめて記載されているが、歴史語用論の観点からは区別して考える必要がある。辞書などでは、この用法も現代では古い用法とあるが、現代英語のコーパスである BNC や Wordbanks で調査してみると、以下のようにこの用法を見つけることができる。

Stage 4 話し手の感動

- (14) Ooh I say, there's a nice lot of flowers in that shop! (BNC 1866KCN)
- (15) I say! What a huge cake! (OALD6)
- (16) And and oh I say it's one o'clock. (Wordbanks UKspoken0242)

(14)、(15)、(16) では、感嘆文と共起したり、間投詞 oh と共起しており、話し手の側の感嘆的な用法であることがわかる。

以上のように、*I say* の用法を Stage 1 から Stage 4 に分類して通時的に見てきたが、OED を参考にして、Stage 1 から Stage 4 のそれぞれの意味における初例の年代を通時的に表してみると図1のようになる。

	11th	12th	13th	14th	15th	16th	17th	18th	19th	20th
命題	-----									
繰り返し			-----							
呼びかけ							-----			
感動									-----	

図1 OED による *I say* の歴史的発達

OED によると、命題用法は、古英語の 1000 年以前から存在し、繰り返し用法は 1220 年からで、呼びかけの用法が 1611 年から見られ、最後の話し手の感動を表す用法は 19 世紀からとなっている。この通時的な発達を、他の語用論標識の発達と比べてみよう。Brinton (2002) は、語用論標識 (Pragmatic Marker) のプロセスには、一方向化が見られると述べ、それを一般化して次のように公式化している。

Matrix Clause > Parenthetical > Pragmatic Marker (Brinton (2002: 2))

I say も上で述べた Stage 1 から Stage 4 までをみると、母型文から、挿入節、そして語用

論標識という方向性が見られ、この一般化が当てはまると言える。

また、Traugott は文法化の一方仮説について以下のように結論づけている。

Propositional > Textual > Expressive/Interpersonal (Traugott (1982: 257))

I say をこの文法化の一方仮説に当てはめてみても、最初の命題用法から、次に Textual な、つまり文と文を結びつけるようなテクスト的な機能を持つようになっている。これは、*I say* においては、語・句・文などを繰り返すときに用いられる繰り返しの用法に相当し、発話とその前の発話とを結びつける用法とみなすことができる。そして、最後に、Expressive/Interpersonal のような対人的な用法、つまり呼びかけの用法や、話し手の感動を表す用法が発達してくると考えられ、この一方仮説に *I say* もあてはまると言える。

4. *I say* の社会言語学的特徴

本節では近代英語ドラマコーパスから明らかになった、*I say* を使用する人物の社会言語学的な特徴を以下のように4つにまとめる。

(i) 語用論標識としての *I say* は主に男性の人物によって用いられる。*I say* の用いられている場面から、*I say* は力強く、相手に対してやや威圧的な印象を与える標識であると考えられる。このことは、Blake(2002: 298)でも同様の指摘をしている。

(ii) 劇の中で、ある特定の人物が *I say* を何度も繰り返し用いる。例えば、*Gammer Gurton's Needle* (1566)における Hodge や *The Country Wife* (1675)における Mr Pinchwife のような滑稽な人物である。劇の中で、滑稽な登場人物に語用論標識を、時にはオーバーなくらい何度も使わせることにより、その人物のキャラクタライゼーションとしての文体的な効果を生むと考えられる。

(iii) 3番目に、下の(17)の例で *Sirrah* が使われていることからわかるように、下層の人物に対して使われる。劇中では、主人が召使いに対して用いることが多く、その際には呼びかけ語や命令文としばしば共起する。また、時には、誓言 (Swearing) とともに見られたり、*rogue, villain* のような悪態語とも共起することもある。いずれにしても目上から目下に対して用いる用法であると言える。

(17) *Sirrah, I have a good mind to – Get you out, I say!*

(1707 Farquhar, *Beaux' Stratagem* 4.1.210)

(iv) 4番目の特徴として、家族内、特に親が子に対して *I say* を用いることが多い。(18) の *wench* は OED によると、もともと女性を指す語であるが、娘や妻への親愛を示す呼びかけ語として使われるとある。

(18) Kiss thy old father, wench. Kiss me, I say. (1796 Coleman *The Iron Chest* 1.1)

5. まとめ

以上のように歴史語用論研究におけるコーパスの有効性と、コーパスを利用した文法化の一例として語用論標識 *I say* の歴史的な用法の発達について紹介した。

今後も、通時的なコーパスが増加し、コーパスのサイズ・ジャンルともに、拡大の一途を辿ると思われ、歴史語用論においても、電子コーパスを利用した研究がますます増加すると考えられる。コーパスの利用は、歴史語用論にとって、非常に有効な手段であるが、注意しなければいけないのは、コーパスを利用するときに、作品のごく一部だけを集めたコーパスでは、その作品全体の言語の状況が見えにくくなるという危険性もある。また、歴史語用論のように、特に語用論的な意味を調査する際などは、コンテキストをかなり必要とするので、コーパスの量だけでなく質も重要となるであろう。また、コーパスから見えにくい部分、例えば、話し手と聞き手という社会的な関係が言語にどのような影響を及ぼすかという点について、コーパスからどのようにして明らかにできるかが今後の課題となろう。

*本稿は第8回日本語用論学会シンポジウム(2005年12月 於京都大学)において発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1) Jucker 氏のホームページ(<http://www.es.unizh.ch/ahjucker/HistPrag.htm>) には Historical Pragmatics に関する参考文献が523件掲載されている。(2006年9月現在)
- 2) 例えば、第12回 ICEHL (国際英語歴史言語学大会) や第16回 ICHL (国際歴史言語学大会) である。さらに最近では、辞典の類にも Historical Pragmatics の項目が採用されるようになった。Traugott (2004)、Jucker (2006) 参照。
- 3) 近代英語ドラマコーパスは、1500年から1900年までの400年間における劇作品だけのコーパスで、100年ごとに10作品ずつ全部で40の悲劇・喜劇が含まれている。
- 4) この点に関して、語用論学会のシンポジウムにおいてフロアより貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝する。

参考文献

- Blake, N. F. 2002. *A Grammar of Shakespeare's Language*. New York: Palgrave.
 Brinton, L. J. 2002. "The Development of Pragmatic Markers in English." Paper Presented at Symposium on Grammaticalization, Aoyama Gakuin University.

- Brinton, L. J. 2005. "Processes Underlying the Development of Pragmatic Markers: The Case of (*I*) *Say*." In J. Skaffari et al. (eds.) *Opening Windows on Texts and Discourses of the Past*, 279-299. Amsterdam: John Benjamins.
- Carroll, R. et al. 2003. "Introduction." In R. Hiltunen and J. Skaffari. (eds.) *Discourse Perspectives on English: Medieval to Modern*, 1-12. Amsterdam: John Benjamins.
- Hansen, M. M. and C. Rossari. 2005. "The Evolution of Pragmatic Markers: Introduction." *Journal of Historical Pragmatics* 6:2, 177-187.
- Jucker, A. H. (ed.) 1995. *Historical Pragmatics: Pragmatic Developments in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins
- Jucker, A. H. 2005. "News Discourse: Mass Media Communication from the Seventeenth to the Twenty-First Century." In J. Skaffari et al. (eds.) *Opening Windows on Texts and Discourses of the Past*, 7-21. Amsterdam: John Benjamins.
- Jucker, A. H. 2006. "Historical Pragmatics." In K. Brown (ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2nd ed. 329-332, Oxford: Elsevier.
- Peikola, M. and J. Skaffari. 2005. "A Frame for Windows: On Studying Texts and Discourses of the Past." In J. Skaffari et al. (eds.) *Opening Windows on Texts and Discourses of the Past*, 1-4. Amsterdam: John Benjamins.
- Saito, T. and M. Imai. 1988. *A Concordance to Middle English Metrical Romances*, 2 vols. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Shiina, M. 2003. "How Spouses Used to Address Each Other: A Historical Pragmatic Approach to the Use of Vocatives in Early Modern English Comedies." *Bulletin of the Faculty of Letters*, 48. 51-73. Tokyo: Hosei University Press.
- Traugott, E. C. 1982. "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization." In W. P. Lehmann and Y. Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, E. C. 2004. "Historical Pragmatics." In L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 538-561. Oxford: Blackwell.